

令和4(2022)年度 病害虫発生予報 第2号

令和4(2022)年5月20日
栃木県農業環境指導センター

次作での病害虫発生防止のため、栽培終了時まで確実な防除を行いましょう！

予想期間 5月下旬～6月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 昨年10月の再生稲調査での本病の発生はやや少ない(平年比82%：ほ場率、平年比18%：株率)。(－)
・ 昨年11月のウンカ類の越冬前幼虫の発生量はやや多い。(+) ウイルスの保毒虫率はやや少ない(県平均2.4%)。(－)
- (3) 対 策 ・ 昨年発生が多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備 考 ・ 県内の保毒虫率は低下傾向であるが、気象条件によってはヒメトビウンカの発生量が増える場合があるので、引き続き注意する。
・ [令和3\(2021\)年度植物防疫ニュースNo.11](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比156%：ほ場率)。(+)
・ 向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 開花・出穂期での発生がない場合でも、不稔粒発生や曇雨天などによって登熟期後半に多発することがある。今年は県南部を中心に既に赤かび病の発生が確認されているので、天候やほ場をよく確認し、追加防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [令和4\(2022\)年度植物防疫ニュース No. 1、3](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 本ほで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ほ作業後に親株の管理作業を行わない。
・ 雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。
・ 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし、抵抗性の発達を抑制する。
・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり ベと病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比138%：ほ場率、平年比139%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 整枝や摘葉等を適切に行い、風通しを良くするなど、過湿防止につとめる。
・ 発病葉や被害残渣は、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ 発生初期に、ホライズンドライフロアブル(RACコードF:27,F:11)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [キュウリベと病菌薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 野菜類・花き類 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 5月第1半旬までの青色粘着板への成虫の誘殺数は多い。(+)
・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。
・ 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
・ 発生初期から薬剤を散布する。薬剤感受性の低下を防ぐため、同系統薬剤の連続散布は避ける。
- (4) 備 考 ・ アザミウマ類はウイルス病の病原ウイルスを媒介する。
・ [アザミウマ類薬剤感受性検定結果、検定結果\(続報\)](#)を当センターHPに掲載中。

6 なし 黒星病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率、株率)。(一)
 ・ 向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 発病した葉や果実は伝染源となるため、摘み取ってほ場外で処分する。
 ・ 病害が広がらないように、定期的に防除を行う。薬剤はかけむらがないように、十分な量を丁寧に散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
トマト	灰色かび病	やや少	平年並	きゅうり	コナジラミ類	やや多	多
	葉かび病	平年並	やや多	たまねぎ	べと病	平年並	やや多
	うどんこ病	平年並	やや多	なし	アブラムシ類	平年並	やや多
	コナジラミ類	やや多	多		シンクイムシ類	やや多	多
きゅうり	灰色かび病	多	多	きく	ハダニ類	やや少	平年並
	褐斑病	やや多	多	野菜類	アブラムシ類	多	多

○施設栽培の病害虫

- ・ トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ「出さない」対策を徹底しましょう。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、注意が必要です。
- ・ 栽培末期の病害虫は、各種薬剤に抵抗性を発達させている可能性があります。葉かき後の葉や残渣に付着した病害虫の拡散防止のため、ほ場内外に放置せず、ビニル袋などで密封し枯死させてから処分しましょう。

○ウメ・モモ・スモモ・サクラ クビアカツヤカミキリ(特定外来生物)

- ・ 暖かくなると幼虫の動きが活発になるため、フラス(木くず)の排出が盛んになります。県内での発生地域は拡大傾向にあるので、これまで発生が確認されていない園地においても見回りを行いましょう。発見時には農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・ [クビアカツヤカミキリ注意喚起チラシ](#)及び[令和4\(2022\)年度植物防疫ニュース No. 2](#)を当センターHPに掲載中。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和4(2022)年5月現在、全国25都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・ 健全な種苗を導入するとともに、発病株が発生した場合は早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・ [サツマイモ基腐病に注意!](#)を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。
- 4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

1か月気象予報(予報期間5月21日から6月20日 5月19日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率40%です。降水量は、平年並または多い確率40%です。日照時間は、平年並または少ない確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20%	40%	40%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

